

## 学 位 論 文 審 査 の 要 旨

学位申請者	高梨 久美子 【比較社会文化学専攻 平成26年度生】	<div style="text-align: center;">要 旨</div> <p>本論文は、ヨーロッパに巨大な国家が林立し、合従連衡の複雑な外交と国際関係が出現した近世において、それらの外交を担った常駐大使の活動を丹念に追ったものである。神聖ローマ皇帝カール5世（スペイン）からイギリスに常駐大使として派遣されたウスタシュ・シャピュイが、ヘンリ8世期のイギリスでどのような外交活動を行ったのかを、主にシャピュイから皇帝への報告書簡を中心とした膨大な史料から克明に跡付け、従来のイギリス史研究では見落とされてきた新事実を明らかにしている。</p> <p>16世紀前半、イギリスはヘンリ8世の離婚問題を契機に国王を首長とする国教会体制をとり、スペインとフランスという2大勢力の狭間で生き延びてゆくために主権国家への道を歩み始めていた。上訴禁止法（1533年）や国王至上法（1534年）制定はイギリス側からすると主権国家への道を決定づける意味があり、イギリス史研究上もその意義が高く評価されてきた。しかしそれはあくまでもイギリス国内に限ってのことであり、この時期の大使書簡を見る限りこれらの法がイギリス国制を大きく変える画期的なものであるとの認識は、当事者の一方であるカール5世側にはなかったことを本論文は明らかにした。その後1536～38年にかけて、国際的に孤立していた弱小国イギリスは、時に誇大な称号を主張し、ネーデルラントとの通商問題やイタリア戦争における中立政策、王女メアリの正嫡問題などを外交カードに、イギリス信教体制の黙認という譲歩をスペインから引き出し、1543年、スペインとの対仏同盟締結を機に議会で王の称号を正式に決定するなど、徐々にかつ慎重に、外交と内政を連動させつつ主権国家へと歩み始めたのである。</p> <p>審査では、膨大な報告書簡史料を丹念に読み込み新事実を実証的に明らかにした点が高く評価された。しかしながらそれらの新事実の持つ意味をより明確に提示するために、研究史や各章の論点を整理することが求められた。そこで序章・終章を中心とした大幅な加筆修正がなされた結果、自国史の視点にとどまりがちなこれまでのイギリス史研究に対して、外国大使という他者から見たイギリスという独自の視点に立つことで、通説に対する修正を試みるという本論文の意義もより明確となった。</p> <p>審査委員会はこうした修正を妥当なものであると評価した。公開発表における質疑応答も簡にして要を得た適当なものであった。以上の点から、本審査委員会は、本論文を博士論文としての水準に十分達していると判断し、博士（人文科学）、Ph. D. in European History に相当するものと認めた。</p>
論文題目	16世紀前半スペインの対イングランド外交交渉 ーウスタシュ・シャピュイ大使を中心にー	
審査委員	(主査) 教授 新井 由紀夫	
	教授 安成 英樹	
	教授 岸本 美緒	
	准教授 清水 徹郎	
	こども教育宝仙大学こども教育学部 教授 山本 秀行	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否（可・<b>否</b>）</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <div style="border-left: 2px solid black; border-right: 2px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p>イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p>ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p><b>エ.</b> 学術ジャーナルへ掲載されている、 もしくは予定されている</p> <p>オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> </div> <p>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	